



子どもたちの笑顔が元気の源に

「おはようございます。気をつけていってらっしゃい。」町田駅に程近い地域の通学路から明るい挨拶が聞こえてくる。地域で子どもの見守り活動を行う声だ。河原陽子さんは見守り活動に参加する一人。幼稚園児から大学生まで多くの学生が歩く通学路に朝7時半から8時半まで立っている。

町内会・自治会の活動に長く携わっていたという河原さん。狭い道を子ども



インタビュー中の河原さん。見守り活動ではお揃いのベストと旗を持って行う。

たちが一斉に通学する様子を見て、安全な通学路にしたいと思い、活動を始めたという。通学路には、見通しの悪い道や交通量の多い道もある。「事故はあっちゃんいけなもの。鞆がクッションになって怪我を免れたような危ない出来事もあったんです。見通しが良いところでも事故はあるので、本当に気をつけないと。学生さんは急いで通学していたりするから。」と真剣な眼差しで語る。近頃はコロナ対策のため車通勤する人が増え、交通量が増えており、より注意を払うようになった。

河原さんは可能な限り見守り活動に参加し、通学の様子だけでなく、子どもたちの様子も見守っている。「元気に挨拶を返してくれる子もいれば、今日は辛そうかなって思う子もいる。声をかけた

ら『お腹が痛い』って言うので、学校に着いたらすぐ保健室に行くんだよって声をかけたり、転んでひざが血だらけになっていた高校生を近くの小学校の保健室に連れて行ったこともあって。中には『おせっかいおばちゃん』なんて言う子ども、挨拶すると『いってきまーす!』と明るく答えてくれる良い子で。短い会話だけど、子どもたちの元気な笑顔にホッとすし、自分も元気をもらえて、笑顔になれる。」活動するうちに、放課後に畑仕事をしていると、通りかかった子どもたちが「畑の河原さ〜ん!」と声をかけてくれるようになったのも喜びの1つ。

自分が健康でないと活動を続けられないので、体には気をつけているという河原さん。子どもたちの笑顔をずっとつないでいきたい、と目を輝かせる。

温もりをみんなに



みんなの食堂の開催に向けた打合せ。

町田駅の喧騒を東側に抜けると広がる穏やかな雰囲気の高ヶ坂・成瀬地区。高ヶ坂第2アパートの集会所では毎月第4金曜日にみんなの食堂が開かれている。

みんなの食堂は、子ども食堂のター

ゲットを高齢者まで広げ、年齢を問わず誰もが気軽に集まり一緒に食事をしながら他愛もない話をする、地域の人の居場所となることを目標に始まった。コロナ禍の今は会食は行えずお弁当の配布をしている。



代表の市川恵子さんは、民生委員を18年、保護司を16年経験し、長年「家族」について最前線で向き合ってきた。

「保護司をしていた時、『警察沙汰になると家族が悲しむよ』と声をかけた子どもに、『家族って何ですか?』と言われ衝撃を受けました。現実には家族の感覚が分からない子どもがいるのだと。」

幼少期に家族の愛情を受けずに育った親は、自身の子どもへの関わり方が分からず、結局その子どもも家族の愛情を知らずに大人になっていく。そんな負の連鎖を感じるなかで、「子どもが育つときに、他の大人と話すことも大

切だし、若いお母さんが相談できる場所も大切。問題を抱えている人も、そうでない人もみんなが集まれる場所があってほしい。」と思い、みんなの食堂を始めた。

「ここに来る人の中には『暮れから正月まで人と話していない、話せてよかった。』と言う人もいます。家のドアを閉めてしまうと孤独なんだと感じました。活動がきっかけで、運営者同士のつながり、利用者とのつながりが生まれます。みなさんが来て、喜んでいただけることが嬉しいです。」と市川さんは優しく話した。ここには家族の温かさがある。

みんなの食堂前。開催日には旗を出す。



配布している食べ物。